

大学院教育支援機構（DoGS）海外渡航助成金 報告書

Outcome report

計画名 Plan	変わりゆく熱帯林の狩猟採集民女性と夫婦のあり方 — 日常的事象の分析から —
氏名 Name	小山 祐実
研究科・専攻・学年 Graduate school/Division/Year level	アジア・アフリカ地域研究研究科・アフリカ専攻（5年一貫性博士課程）・4年
渡航国 Country	カメルーン共和国
渡航日程 Travel schedule	2023年 8月 8日 ~ 2023年 12月 3日

渡航計画の概要 Outline of the travel plan

本研究の目的は、カメルーン共和国東南部に住む狩猟採集民バカ・ピグミー（以下バカ）の集団を対象に女性に焦点を当て、熱帯地域における森林開発や住民の定住化が進む中で、バカ社会に特徴的な平等主義が夫婦間でどのように反映されているのか日常実践から明らかにすることである。

今回の渡航は、これまでに行った量的調査の継続と新たに質的調査を加え、熱帯雨林の季節性と調査対象集団の生業を考慮した長期的な視点で分析を行うことを目的とした。

報告者は以前 2022 年 9 月から 2023 年 4 月にかけてバカの夫婦を対象に生活時間調査を実施した。一人の対象者を追跡し観察する個体追跡法¹を用いてタイムサンプリングを行い、日常生活における男女のやり取り、夫と妻双方の一日の活動内容について詳細に記録した。2022 年 9～11 月の大雨季は家事・育児、農作業など、12～2 月の大乾季は森での植物採集や漁撈、狩猟などの食料調達について調査し、生業や生活スタイルの異なる 2 つの季節において日常生活の実態を調査した。それと同時に男女が共に過ごす距離と時間を測定したところ「長時間近距離」が多く夫婦間で見られた。

今回の調査では、同じ村内で居住エリアの異なる 2 つのバカの集団に対象者を増やし、彼らの生業に大きく影響を与える 7 月～9 月の期間を網羅するとともに、インタビュー調査を加えることで、観察によるデータのより正確な分析を試みた。具体的には、7 月～9 月はバカにとって貴重な収入源となる換金植物の収穫・加工が行われるため、女性グループや個人の採集活動に同行して林産物の採集や森林での活動を観察し、このシーズンの男性との仕事の違いを明らかにする。9 月～11 月は大雨期にあたり、森での広範な移動が制限されるため、定住集落にて性的分業、性規範、夫婦関係に関する聞き取りを中心に行った。その上で家庭内における男女の役割の違いと関係性、そしてバカの結婚生活について考察する。

成果 Outcome

1. 調査の概要

今回の渡航では同じ調査村の中でキャンプサイト 2・3 を追加し 2023 年 8 月～11 月にかけて合計 55 日間（715 時間）、新たに 21 組の夫婦および寡婦・寡夫 4 名（女性 22 名、男性 19 名）に対しタイムサンプリング調査を行った。各調査日 6:00～19:00 の 5 分毎に調査対象者の活動内容・活動場所・一緒にいた人物を詳細に記録した。また 42 名（男性 15 名、女性 27 名）に対し半構造化インタビューを行った。表 1 は 2022 年～2023 年にタイムサンプリングと聞き取り調査を実施した人数（括弧内に記載）と性別を年代別に示した。

¹ 山内太郎, 「日常をハカル: 時空間利用と身体活動への展望」『日本食生活学会誌』第 28 巻 4 号, 2018 年, 247-252.

表1 調査対象者の人数及び年齢、性別

Informants' age & sex of time sampling *(number of people interviewed)

number of informants	SEX	TOTAL	10s	20s	30s	40s	50s	60s
CAMP SITE 1	male	4(1)	0(0)	2(0)	0(0)	2(1)	0(0)	1(0)
	female	5(3)	0(0)	2(1)	2(1)	0(0)	1(1)	0(0)
CAMP SITE 2	male	14(5)	2(0)	3(0)	4(1)	4(1)	4(2)	1(1)
	female	16(12)	2(2)	2(1)	4(4)	3(1)	3(2)	2(2)
CAMP SITE 3	male	5(9)	2(1)	2(4)	0(0)	1(1)	0(2)	0(1)
	female	6(12)	2(3)	2(3)	1(2)	1(1)	0(2)	0(1)
TOTAL	All	50(42)	8(6)	13(9)	11(8)	11(5)	8(9)	4(5)
TOTAL	male	23(15)						
TOTAL	female	27(27)						

2. データ整理・分析

① 活動カテゴリー

タイムサンプリング調査で得られたデータの分析にはタイ・ラオスでの生活時間調査の例²を参考に表2の活動カテゴリーを設け活動内容の仕訳を行った。

表2 活動カテゴリー

I 生業		II 副次的生業		III 家庭関連活動		IV 娯楽・個人活動		V 社会活動	
a	狩猟	a	たばこの葉採集	a	伐採	a	睡眠／仮眠	a	農耕民と交換／交渉
b	採集	b	おやつ（フルーツ等）	b	薪集め	b	休憩／座る	b	売買
c	農業	c	伝統薬の生成	c	火おこし	c	俳諧	c	会議への参加
	火入れ	d	ものづくり	d	道具の手入れ／修理	d	おしゃべり	d	訪問
	草刈り	e	森林産物の加工	e	掃除／片付け	e	たばこ	e	家づくり（手伝い）
	種まき			f	洗濯	f	食事／おやつ		
	収穫			g	調理・関連する作業	g	遊ぶ		
d	漁撈			h	水汲み	h	トイレ		
e	ハチミツ採集			i	子どもの世話	i	水浴び／衛生		
f	出稼ぎ・賃金労働			g	妻／夫の世話	g	歌／踊り／音楽を聴く		
						h	飲酒		

② 個体間距離

なお夫婦が一日のうちどれだけ一緒にいるのかを明らかにするためサルの生態調査などに使用される（西川 2014）個体間距離（Inter-Individual Distances）を用いて滞在時間と距離を記録した。分析には次の4つの範囲区分を設けた。

- D1：目視でき且つ 1.5m 以内の距離（Visual range within 1 to 1.5m）
- D2：普通の声で会話ができる距離（Auditory range with normal volume of voice）
- D3：大きな声で会話ができる距離（Auditory range with loud voice）
- D4：声の届かない距離（Beyond auditory range）

² 山内太郎，大西英之「ラオス農村の農閑期における成人の栄養状態、時間利用、身体活動量」『2004年度生態史プロジェクト報告書』2004年，269-277.

3. 結果

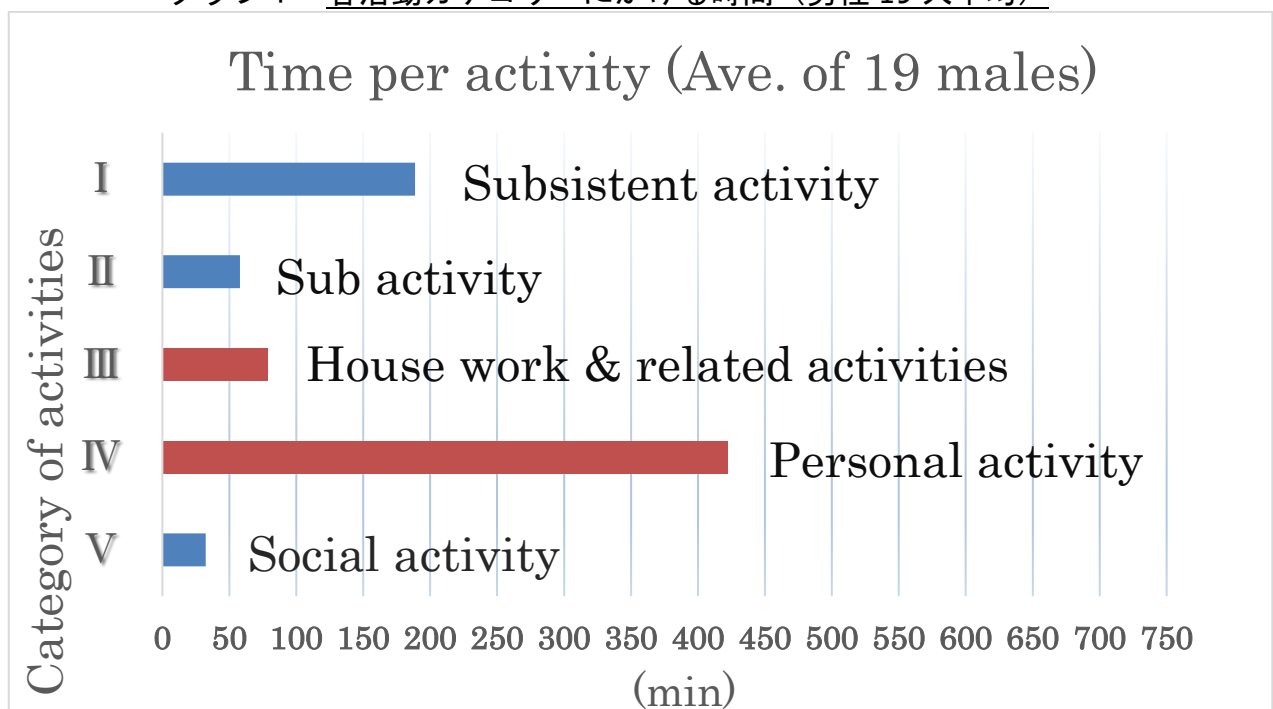
① 性的分業と労働負担

男女による生業活動や時間利用には大きな違いがみられた。グラフ1、2はそれぞれ男女が各活動へ一日にどれくらいの時間を費やしているのか平均を表したものである。生業・副次的生業にかかる時間は男女ともに同程度であるが、主に居住地で行う活動、家庭関連活動及び娯楽・個人活動をみると、男性は個人的な活動に多くの時間を費やし、女性は家庭関連活動へ従事する割合が多くなっており、家の労働負担は女性に傾いている。したがって夫婦間において明確な役割分担が存在するといえる。

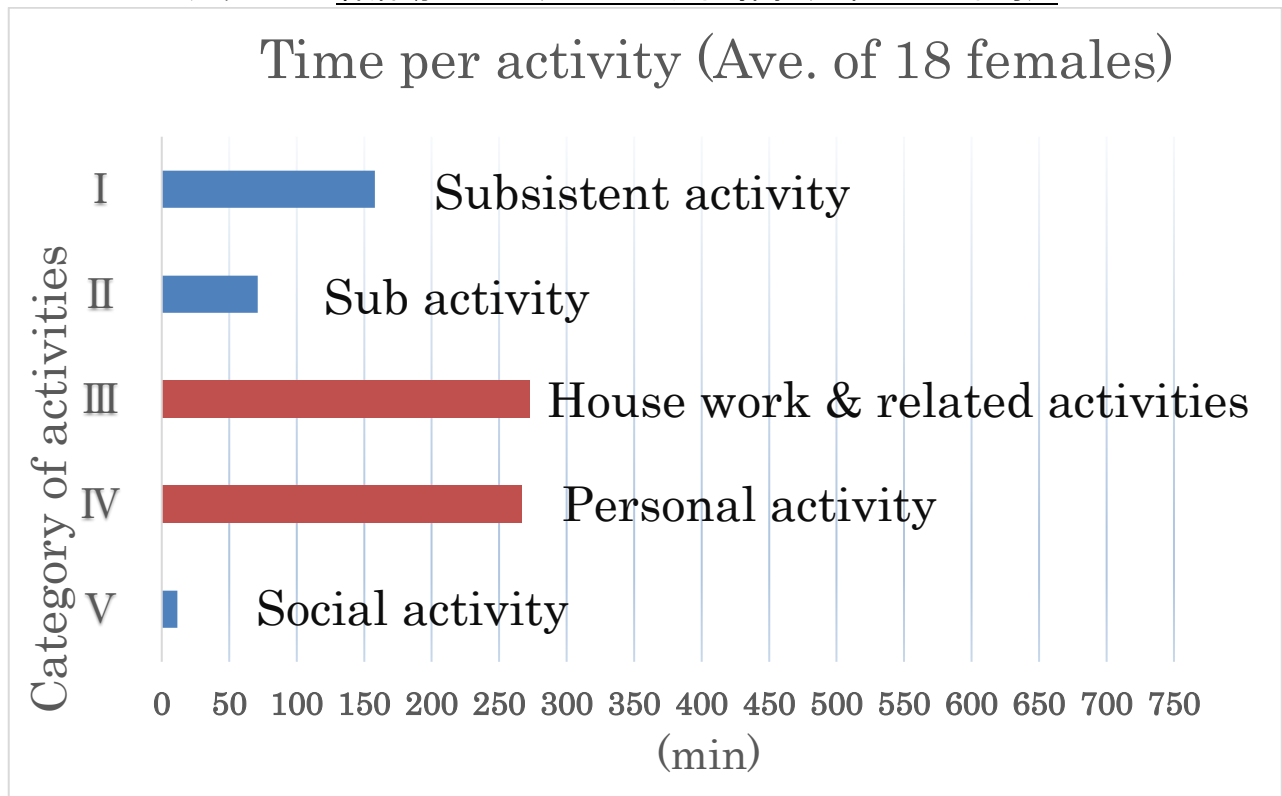


生業にインタビューからは、「女性の仕事」、「男性の仕事」といった性的分業が集団内で認識されていた。またアフリカ熱帯地域に限らず世界各国で広く当てはまることであるが、水汲み、薪の調達、調理などの家事労働は女性の仕事であるとされている。そうではあるものの、性的分業は常に固定的なものではなく、例えば家事に協力的な夫は積極的に妻の仕事とされている作業を代行または手伝いなどをするし、女性がいなければ男性がすべての仕事を行う、その逆のケースも頻繁に見られる。また労働負担に関する質問をしたところ、「自分たちの（女性／男性の）の方が仕事量が多く大変であり、一方で異性の仕事は楽だ、あまり仕事をしない」といった意見がしばしば見られた。タイムサンプリングでは、女性の方が長時間にわたり複数の仕事数をこなしていたが（今回の調査では運動強度を考慮していない）、男性による女性への仕事に関する理解は低かった。

グラフ1 各活動カテゴリーにかかる時間（男性 19人平均）



グラフ2 各活動カテゴリーにかかる時間（女性 22 人平均）

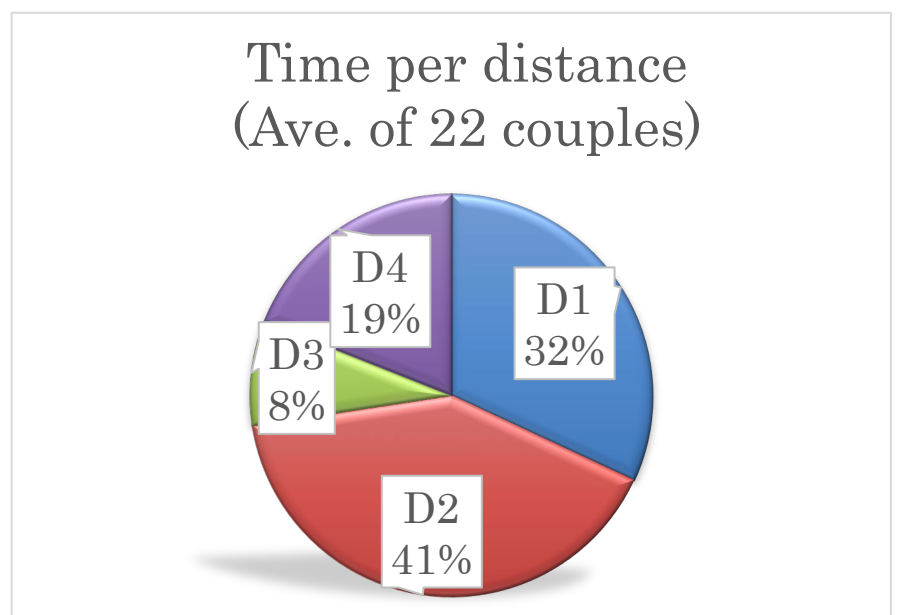


② 滞在時間と距離の測定

今回の調査でも同様に長時間近距離で夫婦が過ごす様子がみられた（グラフ 3）。1日 780 分の観察時間のあいだ 8 割以上を相手の居場所がすぐわかる場所（D1~D3）で過ごし、そのうちの約 9 割が近い範囲（D1~D2：目視でき且つ 1.5m 以内の距離～および普通の声で会話が出来る距離）で行動していることが分かった。

夫婦が近距離で過ごす理由について、喧嘩の頻度や原因に関する次のような聞き取りから説明が可能である。回答者 42 名のうち夫婦喧嘩の原因として最も多かったのが「妻／夫への嫉妬」であった。どのようなときに嫉妬するかという問いに対して、「相手が外出している時、長時間不在にしている時」、次に「他の異性と一緒にいる様子を見たとき」といった回答もあったが、物理的距離に起因するものが一番であった。おそらく、熱帯雨林という環境において安全性や生業活動の効率化といった観点からパートナーと行動を共にするメリットがあるであろう。加えてインタビューや日常の観察から配偶者に対する嫉妬心や愛着・安心感といった心理的な理由が関係している。

グラフ3 1日の観察時間のうち各距離ごとに夫婦が滞在した時間の割合（男女 22 組平均）



4. 考察・まとめ

① 不平等な役割分担と自由なジェンダー観

バカの家庭では圧倒的に女性の労働負担が多く、子育てと衣食住に関わる全ての活動に通じ、人々を日常的に支えているのは女性である。タイムサンプリングのデータから明らかなように、家の外では男女ともに生業活動に従事しており、食料調達や現金獲得のため労働時間は同じくらいであった。一方で居住地の森のキャンプサイト及び定住集落では、男性は「何もしない」、「休む」といった娯楽・個人活動の割合がほとんどを占め、女性による家庭関連活動の従事時間は長くなっている。調査中は労働負担の偏りに関して女性による不満の声が上がるということが少なくなかった。

ところが、ここで「バカ社会では女性が外や家で家族のため実質的な労働を行うだけで、男性は妻子と財産を所有する優位な立場である」と考えるのは早い。この点に関して夫婦のあり方やジェンダー像に関するインタビューで興味深い結果が得られた。バカ社会における性規範について理解するため社会的に求められている女性像、男性像を知るために半構造化インタビューを実施した。あえて「良き妻／夫とはなにか」という抽象的な質問をしたところ回答者 42 人のうち多い順に「わからない (13 名)」、「バカの人は皆いい (9 名)」、「生殖・身体に関する特徴 (8 名)」、「綺麗な服や調理道具を持っている (5 名)」、「人と食べ物を分け合う (4 名)」などが挙げられた。しばしばわからないと回答した人は「いろいろな性格の人がいてどれが良いということはない」と付け加えた。調査対象者のなかで特に印象深い回答をした調査地のバカのリーダーとされている K 氏のことばを紹介する。「キャンプには良い人も悪い人もいる。それも含めて一緒に生きることが重要である」

インタビュー調査からはバカ社会全体を反映した人々の考え方が垣間見えた。つまり、男女ともに固定化されたジェンダー像、夫婦のあり方、社会が求める人物・性格というものは殆ど存在していない。一方で、例えば良い妻とは何かという先の質問に対し、バカ社会に特徴的な食物分配に関する回答（人々に食べ物を分け与える）のみが性格的な描写としてなされ、個々人の性格の違いを認め、共生していくことに重きを置いている。

② 外部社会の影響と男女の役割の変化

バカの男女の役割は生活スタイルの変容に適応しているようである。冒頭で述べたように、7~9 月は森林でブッシュ・マンゴー（学名：*Irvingia Gabonensis*）と呼ばれる果物の収穫・加工が行われバカにとって貴重な収入源および油分を含み栄養価の高い食料源となっている。これは伝統的に専ら女性の仕事とされてきた。しかしながら聞き取りを進めていくうちに男性による参加は珍しくなく、今日では男性が女性に同行して協働作業することが一般的になってきている。その背景にはブッシュ・マンゴーの取引価格の高騰が関係している。このブッシュ・マンゴーに限らず、女性の仕事とされているような家事労働に関しても変化がみられる。カメルーン共和国独立後の度重なる近代化政策や 1990 年代以降の伐採会社の参入、続いて 2000 年代以降の自然保護活動などバカの住む熱帯雨林は常に外部社会・国際社会と接するグローバルな空間であった³。これらの外部アクターの往来に伴い道路整備や商品の流通が盛んになり、住民の生活・生業にも影響を与えた。バカは伝統的には食料となる森林産物の生育場所または野生動物の生息状況に応じて森林の中でキャンプ地を変えながら生活していたのであるが、定住化が進み森林での活動が減り、定住集落周辺での農作業の割合が増える過程で、家庭での家事労働負担は増加した。とりわけ居住地と食料、水、薪などの

³ 市川光雄, 2021, 『森の目が世界を問う—アフリカ熱帯雨林の保全と先住民』京都大学学術出版会, p70-71,73,99

調達地が離れれば離れるほどそれを行う女性の負担は増加する。このように家事労働に必要な時間が増えた状況に対して、家事を日常的に行う男性が増えてきたようだ。これは調査を実施した場所うち Camp Site3（表 1 参照）は森から一番離れており、村の中心地から最も近かった。ここ男性は他のキャンプサイトに比べ家事労働をする頻度・時間共に長く、性的分業に関する質問に対し、男性の仕事として「水汲み、薪集め」を挙げていた。また、家庭でも家事が大変であると自覚している男性もおり、男女の仕事関係なく居力して妻を助けたいと話している男性が半数近くいた。

以上のことから、1 世紀以上にわたる政治的・経済的な外部圧力によってバカの生業活動・家事等における性的分業が以前よりも流動的になっていると考えられる。

今後の展望 Prospects for the future

① 研究成果の発表・アウトリーチ

今回の渡航およびこれまでの調査で得られた結果は 2024 年 3 月 27 日~28 日に行われる「生態人類学会 第 29 回研究大会」にて口頭発表する予定である。その後、論文の執筆を進め、2024 年 8 月ごろ狩猟採集民研究を扱う国際ジャーナル「Hunter Gatherer Research」に投稿論文の寄稿を行う予定である。

② 今後の研究内容

今後は主にタイムサンプリングで収集した様々な情報の分析を進めて、多面的にバカの夫婦生活の考察を深める。さらに、データの分析に時間がかかるため、また当初の研究計画にはなかったため、この報告書には盛り込むことが出来なかったが、男女の食事の仕方の違いに興味を持ったため今回の渡航ではタイムサンプリング調査の傍ら、家庭で調理した食材の重さの測定、男女別に摂取した食事内容を同時に記録していた。これらのデータから摂取カロリーを計算し、必要な摂取カロリーに対し十分な食事量と栄養を採れているのか、男女で違いはあるか分析し、生態学的な観点からも男女の平等性について検討していきたい。